

奈良時代の授業

日本で初めて都ができた時代

1 日本に米作りが伝わったのは弥生時代、しかし、弥生時代の村からは、高床倉庫の跡だけではなく、食料にしたと思われるシカやイノシシの骨や、ドングリから作られただんごなどがみつかっています。

これはなぜでしょうか。

実は、弥生時代には、村の人々が一年間、米だけを食べて

暮らしていけるほどの量を、まだ、毎年収穫できていませんでした。

米が底をつく時期には、狩りをして、食料を補う必要があったためです。

その代表的な村の遺跡が、静岡県の登呂遺跡です。



その後、弥生時代から数百年が過ぎ、奈良時代になるとどのくらい米がとれるようになったのでしょうか？




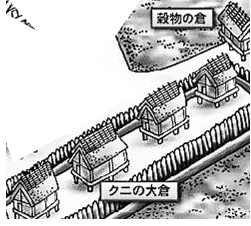

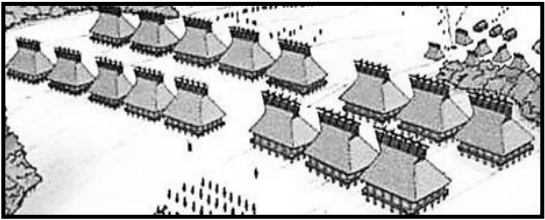

そういうことを記した記録はなかなかないのですが、米作りが安定してきてたくさんの米が日本中で作られ、豊かになってきていたことは確かなことです。

では、それはなぜわかるのか。

弥生時代から古墳時代、奈良時代の倉庫の大きさを比べてみましょう。

倉庫の大きさの変化によって、収穫できた量がどんどん増えていったことがよくわかります。

2 弥生時代から奈良時代までの倉庫の数と大きさを比べてみましょう。

弥生 ↓		登呂遺跡(4棟)	
弥生 ↓		吉野ヶ里遺跡(10~20棟)	
古墳 ↓		法円坂遺跡(16棟)	
奈良			
	正倉院(10~20棟)		

この写真でも、まだ大きさを正しくうつしてはいないので、実際に近い比率でコピーした写真を見てみましょう。

正倉院は、東大寺の巨大な倉庫群の一つが残ったものです。

聖武天皇の使った宝物の多くが納められていた倉庫ですが、「正倉」とは、もともと、税の米などを入れておく倉庫のことを言いました。奈良の都には、それぞれの大きな寺ごとに、こうした倉庫が作られていたそうです。

3 奈良時代の倉庫が、これほど大きかったのをみると、それだけ、米の収穫が増え、豊かになってきたのがわかります。

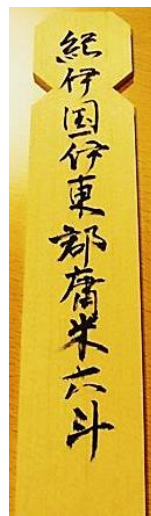
また、この倉庫に集められた穀物は、日本各地から集められ、運ばれてきた物でした。

その証拠が、木簡と呼ばれる木に文字が書かれた札です。

たとえば、次のような木簡(レプリカ)には

「和歌山県から庸(税)として、米を 36 キロ運んだ」

と書かれています。税として運ばれてきた荷物に、この荷札がつけられていたものと考えられます。



奈良時代の都の跡からは、大量の木簡が見つかっていて、

米以外にも税として集められた海産物(ワカメやうに・あわび・カツオ・塩など)、果物(柿)、野菜(カブ・大根)など、さまざまな物が、都に届けられました。

中には、牛乳を滋賀県から届けた荷札(レプリカ)もあり、「生蘇」というのが牛乳を加工した物です。この蘇はチーズのような物ですが、貴族や天皇しか食べられないぐらい貴重な物でした。



このようにして、日本中から集めた大量の穀物があれば、当時、お金の代わりに使って、技術者集団を雇ったり、貿易をしたり、巨大な建築物を作ったりすることもできました。

奈良時代の豊かさの象徴として、二つの物が有名です。

4 奈良時代の豊かさの象徴として有名なものは二つあります。

一つは、みなさんも知っている「奈良の大仏」です。

そして、もう一つは、「正倉院の宝物」です。

まず、正倉院の宝物から見ていきましょう。正倉院は、聖武天皇が好きだった宝物の数々をしまっておいたものです。



琵琶



イソ



大仏開眼式の筆とひも



聖武天皇



まくら



水差し



お香をたく台



グラス



サイコロ



碁石



碁盤



大仏開眼式の時の靴下



靴

正倉院の宝物は、今見ても美しいものばかりです。1300年以上たっているのに、その美しさと、技術のすばらしさは、変わりません。

この美しい宝物の数々は、半分くらいがシルクロードを伝わって中国から輸入されたもの、半分は日本の専門家たちが作りだしたものだそうです。

特に、大仏開眼式に使われたと言われる聖武天皇の赤い靴や、その後の時代に大仏に目を入れるのに使われた鎌倉時代の筆と青いひもは、それを使ったお坊さんの手やひもを握った200人近い人々を想像させてくれます。

貿易で手に入れたアジアからの漢方薬も、この正倉院には60種類もあるそうです。

5 奈良時代の豊かさを表わすもう一つの象徴は、「奈良の大仏」です。

大仏が作られるのに、どんな材料が必要で、どんな道具が必要で、
どういう技術者の集団とどんな知識が必要で、どれだけの人々が
どれだけの時間を使って造ったものだったのか、それを考えてみましょう。

あなたの予想

必要な材料・ 道具は？	
どんな 技術者集団？ どんな知識 が必要？	
何人？ 何日何年？	

今の奈良時代についての学者たちは、大仏は、どのように造ったと考えているのでしょうか？

教科書や資料、絵本などを見て調べてみましょう。



大仏を造るのに、大きな力を発揮した人は、聖武天皇と僧侶の行基です。

行基というお坊さんが、実は、縁の下の力持ちの役目を果たしました。

行基は、渡来人の子孫と言われています。朝廷からは、寺の外で農民の人々に、仏教を教えることを禁じられたりしますが、その制限にもとらわれず、活動し、人々から慕われていました。

特に渡来人の子孫として、行基はさまざまな土木工事の専門家集団を従え、たくさんのため池を作らせたり、橋や港も造ったと言われています。その技術があっこそ、大仏を造ることができたのです。

また、大仏に使われた黄金は、全部で400キロ近く必要でしたが、その一部は渡来人の子孫、東北の王で百済系の人々が黄金13キロ献上したと記録されています。また、当時の新羅から使節団が、黄金を大量に日本に持ってやって来たとも書かれています。

古墳・飛鳥時代と同じように、まだまだ、日本は、材料・技術、どちらの面でも、大仏などの巨大な建造物については、朝鮮半島の国々からのつながり無くしてはできない大工事でした。

⑥ 次に、なぜ、聖武天皇が大仏を建設したかったのか、そのほんとうの謎に迫りましょう。

奈良時代の一番の問題は、日本で初めて大きな都が建設されたことでした。初めてのことであったので、問題がたくさん出てきたのです。

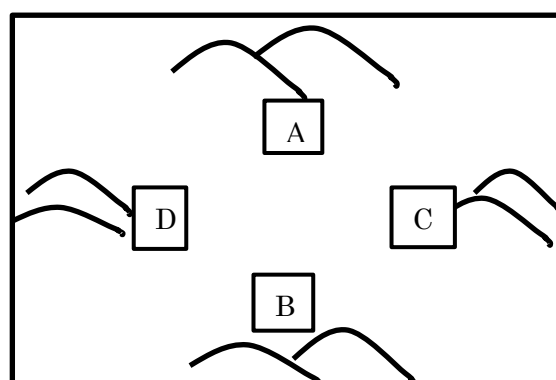
では、日本で、どのように、都が作られ始めたのか、その話からしましょう。

都を造るようになったのは、中国に行った古くからの使節団が、中国の大きな都をみて、あこがれたからでした。

中国では、都の守り神として、東西南北に、四神相応と言い玄武・朱雀・青竜・白虎を置くことをしているのです、それをまねて、都を造ろうとしていました。

みなさんは、奈良県の盆地に、都を造るとしたら、どの地域に作りますか？

右の図を見て考えましょう。



最初に作られた都は、実は、奈良の平城京ではなくて「藤原京」でした。最初の都づくりは、もともと、聖徳太子や蘇我馬子が活躍していたのが、Bの地域だったために、藤原京はBの地域に建設されました。

しかし、藤原京は、16年間のあと、放棄され、平城京が造られます。そして、平安京へ・・・なぜ、都は何度も移されるような問題があったのでしょうか。

実際に、藤原京は、都としては失敗作でした。

平城京の地図を見てわかるように、天皇の住む宮殿は、都の一番北に置かれます。

こうした形の都を、盆地の南側に置くと

都は、一番南から北にかけて下り坂になります。

都の中を流れる川は、南から北へ、

つまり、一般庶民の住む町から、宮殿の中へ、川が流れ込む形になります。



都では、この当時、飲み水は井戸水を利用し、下水は川を利用しました。川までの間は、都を十字に通る道路のわきのみぞを通して下水は流されました。つまり、確かに、この当時は水洗トイレでしたが、道路わきのみぞには、汚れたものは、すべて捨てられるようになっていて、溝がよくつまり、あふれ出ることもよくありました。そうした汚水が、藤原京では、宮殿の中に流れ込むことがあったのです。

四神相応とは、北に玄武＝山々、東に青竜＝川、南に朱雀＝水・池、西に白虎＝街道、という地形を指していたのですが、藤原京は、都の南北が、この四神に対応していませんでした。

この結果として、宮殿に常に汚れた下水が流れ込み、そうした都は放棄するしかありませんでした。そして、平城京が造られました。

新たに造られた平城京は、藤原京の失敗をもとに、よく地形を考えて計画されました。盆地では、Aの地域に都を建設すれば、汚れた汚水は宮殿側から町へと流れ、やがて、下流に流されていきます。

さて、平城京では、すべてうまく行ったのでしょうか。

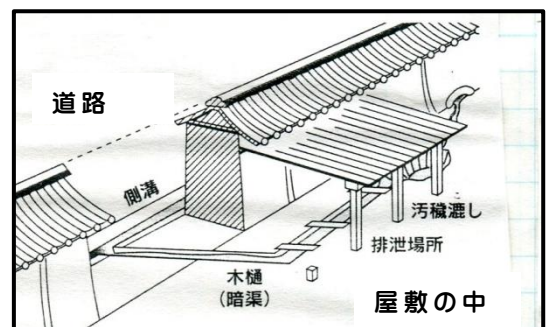
・・・やはり、また大きな問題が起きました。

よく考えてみましょう。

縄文、弥生、古墳時代には、人々は、それぞれの村、地域で暮らしていました。ところが、飛鳥時代、奈良時代になって、突然、都を始めて作り、人々が、何万人と、密集して住むようになったのです。

都市が、初めて、日本列島に造られ、文化としては発展しましたが、一方で、今の都市問題も、飛鳥時代から、初めて大きな問題となったのです。

一番の問題は、やはり、密集した人口と下水でした。



トイレには、穴を掘っただけの物と、道路の溝の水を、屋敷の中に引きいれて水洗式のトイレとして使うものもありました。

今まで村単位で住んでいた人々の下水やごみは、その周辺で処理すれば、問題が起きることはありませんでした。

ところが、平城京では、約5万人ほどが暮らすようになったのです。

毎日5万人が出すごみや汚水は、生活に支障をきたすほどだったことでしょう。

そして、人々が密集して住めば、こうした衛生状態や栄養状態が悪い貧しい人々にとって、伝染病が、命を奪うものとなっていきました。

実際に、今まで日本では見られなかった天然痘が、飛鳥・奈良時代に伝染するように、なっていました。

特に奈良時代の平城京では、実際に天然痘が何度か大流行し、藤原四兄弟と呼ばれる鎌足の子孫、大臣たちが、四人死亡しています。

他にも多くの役人、農民が死亡し、それぞれの部署や地域で仕事にさしきわりが出るほどでした。

それだけ多くの死者が出たということは、同じ都に住んでいても、貧しい人々ほど、多くの人々が亡くなったことでしょう。もし、家族が一家全滅のような状態だったら、どのようなことが起きたのでしょうか？

家族が全滅した家は、亡くなった人々が放置されることもあったかもしれません。都が死者でおおわれて、その都が十分に機能しなくなったなら、都を捨てるしかなかったでしょう。

聖武天皇の時代をはじめとして、飛鳥・奈良時代に何度も都を変えたのは、そうしたことも大きな理由になったことと思います。

都を移す時には、まず、たとえば、平城京のために藤原京で使われた材木、基礎石、瓦などすべてを、川を使って船で運び、都は建設されていきました。しかし、ひんぱんに都を移しても、解決されない問題、特に伝染病の恐ろしさは聖武天皇を不安にさせたことでしょう。大臣たちが、みな全員死亡してしまうような、こうした絶望的な状況の中で、聖武天皇は、仏教をたより、大仏建立によって、社会を安定させられると信じて、大仏建立の命令を出したのです。

日本では、そのころ、仏教は国のものであり、勝手に仏教を広めることは許されていませんでした。

やはり、金の仏像といい、寺院・五重塔といい、経典といい、簡単に造れたり学んだりできるものではありませんでした。もちろん、仏教は普通の農民の人々ものでもありませんでした。

だからこそ、聖武天皇は、巨大な仏を作り、自分が祈ることで、国を治めることができると考え、建立に挑んだのです。

しかし、結果として、大仏は、人々の力を結集して、造り上げられました。
それだけではなく、多くのけが人や、水銀中毒の死亡者も出しながら、完成して
いきます。

そして、その後、何百年にもわたって、大仏は、何度か焼け落ちてしまうとい
う危機があり、そして、また再建され、・・・・・・・・今は、日本人が親しみ
を感じる世界遺産となっています。

私たちの感じる親しみは、大仏の巨大さと歴史上のエピソードが結びついて、
私たちに知られるようになってきたからでしょう。

奈良の大仏には、聖武天皇の祈りがあっただけでなく、
奈良時代の豊かさと伝染病という都市問題、
そして、現場で造った人々の苦勞・困難、
朝鮮半島からの技術や金の流入・・・・・・・・、
こうした時代のようなすがあってこそ巨大な大仏が造られたのだと、
ぜひ、想像してみてください。

奈良時代の授業

ねらい

- ① 奈良時代は、農業が発達し、豊かになった。
- ② 政治の形態としても、国の形を作れるようになってきている。
- ③ しかし、その一方で、課題は都の管理である。
- ④ 大仏は、その課題と豊かさを同時に示している。

授業の構成

骨格を示すにとどめます。大仏、木簡、鑑真についてはふくらませてください。

- ① 奈良時代は、農業が日本列島各地に広まり、米の収穫高は大量に増え、社会全体としては、豊かな時代となった。 ⇒ **正倉院の大きさ**
- ② 国家としての形も整ってきた。最も重要な租税の集中のしくみを裏付けるのが木簡に表わされた税の荷札であり、役人の生活を記した木簡である。
⇒ **木簡の読み取りと、蘇の試食**
- ③ 奈良時代の豊かきの象徴は、正倉院宝物であり、奈良の大仏である。その二つは日本列島の豊かさを表わすとともに、中国や朝鮮半島との強い結びつきを示している。 ⇒ **宝物の写真とトイレ**
- ④ 一方で、奈良時代の最も重要な課題は、都であった。
⇒ **都の下水問題と伝染病**
- ⑤ 仏教は、当時の政治家にとって、たよるべき存在だった。
⇒ **国家鎮護の仏教の目的・
聖武天皇の大仏建立悲願の必然性**